

# 仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第十四号



ウスキー工場のキルン塔(仙台市郊外)



『滅びのモノクローム』(講談社2002年)

**奇妙な符合**

大崎へ向かった。車でしばらく走ったが見つからず、Uターンして戻って来てようやく探し当てた。ひよろりと長い煙突が周囲の太い木の幹と区別がつかず、見逃したらしい。

鬱蒼と茂る木の葉の間から、青緑色の湖水が見え隠れしている。木製のテーブルとベンチが三カ所ほどに設置されている、本場に小さな公園のまん中に、その煙突はあった。薪をくべたであろう暖炉の火床は鉄板で塞がれ、煙突が上に向かって伸びている。

煙突といってもそれは、煉瓦造りのしつかりした四角形の構造物だった。途中からカーブを描きながら細くなる姿は、仙台市郊外にあるウスキー工場で見えた、乾燥用のキルンを連想させた。案内板の説明を読み、目下は奇妙な符合に驚いた。

そもその由来は、スコットランドから日本へ渡ってきたトーマス・B・グラバーが、中禅寺湖や湯川で釣りを楽しむために建てた別荘だった。……

(三浦明博『滅びのモノクローム』より)

文学のある風景

## 小池 光の 気になる日本語

3

### 「イケメン」

むかしはハンサムといった。いまはイケメンという。

イケメンは「いけ面」。広辞苑の新版にはイケメンの項目がちゃんと載っている。

「面はツラのことだが、「いけ」とは何かといえばむろん動詞の「行け」だろう。すると漢字で書けば、誰も書く人などいないが、「行け面」である。

「彼は、なかなかイケメンだ」

「彼は、なかなかイケメンだ」

「彼は、なかなかイケメンだ」

では何のことか、少なくとも咄嗟には、わからない。ひらかな、カタカナ、漢字の三種の文字の使い分けは本当に魔術である。

「行け」といっても命令形ではなく「行ける」の略である。「行けて」と「行けている」の略である。そして「行けている」とは、なかなかよくその「け」がどこに由来するかといえば「行き得ている」の詰まったものと思われる。「ikeite」に連続する母音の一個が落ちて「ikeite」。「それは言える」などという同意の語法があるがそれと同じだ。言い得ている、が、言えるになった。

では、「行く」はまたどこへいくのだろう。行き先は語られない。そこがちょっとしたミステリーである。もっとも「行く」は行き先を明示しなくても、ごく気分的にいくらも用いられる。「いっちょまえ」「いけいけどんどん!」などというとき、それではどこに行きましようかなどと尋ねる人はいない。

あえていえば、平均的水準を超えてその向こうまで行く、凡人のレベルをはるかに凌駕する地平まで行く、行き得ている、という感じなんだろうと思う。つまり、厳密に語のよつてきたるところを辿れば、イケメンとは、並の水準の彼方までメタタク行き得ている顔付きということになり、なかなか複雑な意味なのである。ハンサムはただ外来語の音写だったがイケメンには相応の創意を感じる。

顔のことを面というのはゆかしい日本語といえそうなのだが、ちょっと隠語めいているところがある。メンクイ、面食いの語源を知らないが、人貌を「食う」という発想からしてあまり品性立派なことばとはいえない。「面通し」とか「面が割れる」とかなると取り調べ用語である。

すると隠語というより、お祭りの緑日で売っているプラスチックのおめんの「面」なのかもしれない。一枚の皮膜が表層に張り付いて変身する感覚だ。

### 学芸室日記

○ネット小説・ケータイ小説、ケータイ短歌、フォト俳句などが生み出される今日、文学作品はその媒体を選びません。そこでこの春、当館があらたに打ち出すシリーズが、朗読と音楽・映像・演劇をまじえたステージ「ライブ文学館」です。コンセプトはズバリ「街に出る文学」。観客の皆様にも、五感を全開にして、ページを飛び出したことばを体感していただきたいイベントです。



ライブ文学館第一弾は、伊坂幸太郎さん原作「死神の精度」でした(3/22開催)。朗読は橋本宏嗣さんと石垣のりこさん。次回は元NHKアナ・山根基世さんによる夏目漱石「夢十夜」をお届けする予定です。

○この春の特別展「学部に息づく 夏目漱石の精神」では、漱石が愛読した書物や机まわりの品など、文豪を身近に感じられる資料を展示しています。そのなかの一冊、「Dictionary of idiomatic English phrases」(東北大学附属図書館所蔵)のページの間には、小さな新聞紙の包みが挟まれていました。中身は植物の種という説もあるそうですが、漱石はなぜそれを本の間に挟んでいたのでしょうか。今では本人に確かめる術がありません。さまざまな想像が広がる、ちょっぴりミステリアスではほえましい逸話です。

○特別展期間中、館内レストラン「杜の小径」では特別メニュー「マドンナのランチ」をご提供しています。漱石の代表作「坊っちゃん」の「マドンナ」にちなんで店長が考案した、ハイカラなお料理をお召し上がりいただけます。展示をご覧いただいた後にぜひお立ち寄りください。



「おいしさだけでなく、「マドンナ」のイメージにふさわしい見た目の美しさを考えて作りまし」と三山店長。和洋中の味と彩りを楽しめるメニューです。

とりあえず見栄えのする人貌がおめんのよう張り付いている。その下に何があるかは知らない、知りたくもない。たぶんまったく違うものがあると感づいている。

語の音感からいうと「イケメン」はシャープで乾燥している。「ハンサム」

は穏やかで情緒的。i音、e音と、a音、u音の対比。

時代とともに美の基準はどんどん変化してゆくが、そういう変貌もまた常にことばとともにある。

(仙台文学館館長)

# 「おくの細道を読む」編

特集

二〇〇七年秋に始動した「仙台文学館ゼミナール」。さまざまな講座を開講しましたが、なかでも、多くの方の関心を集めたのが「おくの細道を読む」でした。江戸時代に書かれ、今なお人々の心をとらえる「おくの細道」。その魅力に迫る講座をのぞいてみます。

## 人々を魅了する 古典文学

「おくの細道を読む」には、定員五〇名に対してなんと約二二〇名のご応募が（抽選で外れてしまった方、本当にごめんない）。この人気の謎を探ろうと、受講者の皆さんに参加の



松尾芭蕉もおとずれた塩竈にお住まいの講師・渡辺誠一郎さん。地元ならではの話題に花が咲きました。

東北が舞台となっていて親しみやすく、俳句をたしなむ方にとって作者・松尾芭蕉に学ぶところが大きい。そんなふところの深さが現代人を魅了するのでしょうね。

## 人間・芭蕉

動機を聞いてみました。「東北に住んでいて、奥の細道に触れたいと思った」「芭蕉の道で自分で歩いてみたい」「俳句を作っているの」「学生時代、授業でちょっと勉強したが、あらためて学んでみたい」などなど。なるほど「おくの細道」とは、代表的な古典文学でありながら

## 名文を味わう

「おくの細道」は、芭蕉の旅の

到達点であり、いくつかの俳文集のなかでも完成度が群を抜いているそう。それだけ芭蕉自身、推敲に推敲を重ねたわけですね。講座では、その文章を味わうべく、受講者一同で音読にもチャレンジ。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり……」。古語や難しい表現が続くにもかかわらず、皆さんの声がテンポよく会場に響きます。音読して心地いいのも名

文と言われる所以なのです。あらゆる先行作品を踏まえているのもこの本文の特徴。「白河の関」の部分などは、短い文章に六首の古歌が引かれていて、「今では反則技なんじゃないでしょうかね（笑）」と思わず渡辺さんが評するほど。でも「芭蕉はそういう技巧を使いながら、濃密な世界を作ろうとしていた」とも。また、対の箇所を



ところどころに織りまぜられる講師の冗談に、受講者の皆さんからは笑いが。5回にわたる講座は、終始なごやかな雰囲気です。

なるような仕掛けがしてあるなど、計算された構成になっていて、「もしかしたら芭蕉はいろんな古典をひっくり返しながら考えをめぐらせて、楽しんで書いたのかも、なんて想像できますよね」と渡辺さん。

## 芭蕉を迎える側の 視点

そして、わたしたち東北人は「おくの細道」を、芭蕉を迎える側の視点で読むこともできるのでは、というのが渡辺さんの説。

芭蕉はみちのくを「辺土」「塵土の境」と記していますが、それは「都」対「鄙」という伝統的な文学の系譜に乗ったもの。その認識を外したときに、「おくの細道」にはどんなものが残るのか？ そこから、もうひとつの「おくの細道」が始まる、と渡辺さんは語ります。芭蕉の言う「辺土」に住むわたしたちこそ、その新しい読みはできるのかもしれない。

渡辺さんの軽妙な語り口で進められた「おくの細道を読む」。今年度は、旅を急いだ芭蕉よろしく駆け足でたどり着いたが、一人ではなかなか手が出ない作品を、講師のナビゲートのもと仲間とともに読みすすめる、絶好の機会ではなかったでしょうか。



本文を音読することで黙読とは違った印象が感じられる、との感想もありました。

## 仙台文学館 ゼミナール 2008の ご案内

2007年度に引きつづき、2008年度も多彩なカリキュラムをご用意しました。魅力あふれる講師をお迎えしての各講座、皆様のご参加をお待ちしております。

### 朗読ワークショップ (全5回)

講師：渡辺祥子氏（フリーアナウンサー）  
7月～10月（日曜午前）  
今、静かなブームとなっている「朗読」。発声のしかた、読みかたなど「聞かせる」ための要素を実践練習していきます。講師は朗読家としても活躍中の渡辺祥子さん。

### 宮沢賢治～星の童話を読む (全5回)

講師：佐藤通雅氏（歌人・評論家）  
9月～10月（木曜午前）  
宮沢賢治の初期短歌をとりあげた2007年度に引きつづき、あらたに賢治の童話を読んでいきます。新しくオープンする仙台市天文台での移動講座も予定しています。

### 平家物語を読む (全5回)

講師：佐倉由泰氏（東北大学准教授）  
9月～11月（金曜午前）  
「平家物語」に登場する平清盛の五人の子

### 樋口一葉～日記を読む (全3回)

講師：森まゆみ氏（作家）  
10月～12月（日曜午後）  
東京の下町にまつわるエッセイや、作家の評伝で知られる森まゆみさん。宮城県内で農村生活を始めたご縁から講師にお迎えし、樋口一葉の日記を読み解きます。

### 佐伯一麦と読む現代の文学

講師：佐伯一麦氏（作家）

### 池上冬樹と書評を書く

講師：池上冬樹氏（評論家）

### おくの細道を読む

講師：渡辺誠一郎氏（俳人）

### 川柳指導者講座

講師：栗石隆子氏（川柳宮城野）主幹

### 読み聞かせワークショップ (全5回)

講師：増田家次子氏（ボランお話し会）  
5月～7月（日曜午後）  
保育を学ぶ学生さんを対象に開講します。子どもたちへの読み聞かせのポイント、テクニックなどを「伝授」していただきます。

### 俳句鑑賞～＜現代俳句＞の世界 (全5回)

講師：高野ムツオ氏（「小熊座」主宰）  
5月～10月（土曜午前）  
俳句とはどのような文芸なのか？ 作品を読む楽しみ、味わいかたとは？ 俳人・高野ムツオ氏が、〈現代俳句〉の代表作をとり上げ、その鑑賞のポイントを解説します。

<ご注意> タイトル・時期・時間は2008年3月現在のものです。変更になる場合がございますのでご注意ください。参加方法など詳細は、チラシ（4月頃から配布予定）、仙台文学館ホームページ、仙台市政だより等でお知らせいたします。